

我ら 50 期 ここにあり

鬼を考える①

昔から日本では鬼と寄り添って暮らしてきました。子どもたちは鬼ごっこで遊び、鬼の絵を見て怖がり、鬼が出てくる昔ばなしを聞き、節分になると豆をまいて鬼を追い払う。数ある妖怪の中でも、鬼ほど私たちの生活に溶け込んでいるものはいません。

「オニ」の語源は「おん（隠）」であると言われています。その名の示す通り、姿の见えないもの、この世ならざるものという意味を持っています。普通、鬼と言えば頭に牛のような角が生えていて、虎の腰布を巻いた鬼を思い浮かべますが、それは不吉な方角である東北の鬼門、すなわち丑寅（うしとら）から来ており、のちの時代になったついたイメージです。もともとオニは、あるときは化け物や怨霊だったり、あるときは祖霊や地霊だったり、またあるときは神であったりと、時代や場所により様々な姿を持っていました。そういった「オニ」が、死者の魂を表す中国の「鬼（キ）」と重なり、日本固有の「鬼」になったのです。

鬼を考える②

鬼は一般には、人に危害を加え、ときには人を食べてしまう存在とも考えられており、悪いもの・恐ろしいものの代名詞として扱われることが多いです。しかし全国的にみると、村を守るなど善行を行なって民から慕われたり、崇められ、神として祀られている鬼も少なくありません。鬼が悪者であるというイメージは、昔ばなしやお伽噺の中で定着していったものなのです。

「鬼」は人を形容する言葉としてもよく使われます。残酷さであったり、無慈悲さ・非情さであったり、厳しさ・恐ろしさであったりと様々ですが、大抵の場合、自分の想像力を越えた心の持ち主に対して使います。私たちにとって理解できない人間は、時として鬼になるのです。相手を人ではなく、

鬼として憎む。いつの時代も繰り返されてきたことではありますが、理解からは最もかけ離れた行為です。では、その理解できないはずの鬼を理解するようになるのでしょうか。

鬼を考える③

ご存知、昔ばなしの「桃太郎」には鬼が出てきますが、実は、鬼ヶ島の鬼は温羅（うら）という人物がモデルになっています。彼は百済で起きた戦を逃れ、吉備に渡ってきた渡来人の長でした。温羅は吉備の人々のため、たたら（製鉄）や造船、製塩などの技術を伝授し、人々に慕われ吉備国の王になったそうです。一方では英雄として伝えられる温羅ですが、別の伝承では、吉備一帯を支配する暴君だったともされています。吉備の民を救うべく、桃太郎のモデルである吉備津彦命が派遣され、激闘の末に退治されてしまうのです。どちらの伝承が事実に近いのかわかりませんが、岡山ではいまでも温羅と吉備津彦命が共に大切に祀られています。この話を知った日から、私にとって鬼ヶ島の鬼は「鬼」ではなくなったのです。昔からよく疑問に思っていました。鬼と呼ばれる人々。彼らはなぜ人の心を捨てたのだろうか。いいえ、人は人の心を捨てて鬼になるのではありません。他人の心を理解することをやめた時、私たちはその誰かを鬼にしてしまうのです。